



Title	バラ語彙集(上): 穆曄駿資料の満洲語文語索引(A-J)
Author(s)	王, 海波; Wang, Haibo
Citation	北方言語研究, 16, 265-286
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99353
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99353
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_Wang.pdf



[資料・研究ノート]

バラ語語彙集 (上) *
— 穆曄駿資料の満洲語文語索引 (A-J) —

王 海 波
(嶺南師範学院)

キーワード: バラ語、穆曄駿、満洲語文語、満洲語群

1. はじめに

本稿では、穆曄駿の論文に記録されたバラ語資料に基づき、満洲語文語の同源語による索引を作成する。穆曄駿が記録したバラ語語彙は複数の論文に分散して掲載されており、同一語の異なる語形が別々の論文に記録されている場合も少なくない。本稿の目的は、穆曄駿によって記録されたバラ語語彙を、満洲語文語の同源語のアルファベット順に体系的に整理することにある。

1.1. バラ語の概要

バラ語(巴拉語)は満洲語群に属する言語(または満洲語の方言)である。バラ語に関する言語学的調査を行った研究者は、管見の限り、穆曄駿のみである。バラ語の語彙を記録した穆曄駿の論文には、穆曄駿(1984b; 1987; 1988a)等がある。バラ語は主に張広才嶺の山岳地帯に分布していたが、1982年に消滅した(穆曄駿 1985: 5)。消滅前のバラ語の分布は散在的であり(穆曄駿 1987: 5)、地域間では語彙を中心とする言語特徴に一定の差異が確認されている(穆曄駿 1987: 17, 20-21)。穆曄駿は1964年から1977年にかけて、中国東北部の双城・五常・阿城・延寿・尚志・方正・木蘭・呼蘭・通河・賓県・巴彦の11県に居住する74名のバラ人を対象に現地調査を実施した(穆曄駿 1987: 2)¹。この74名のうち、実際にバラ語が話せたのは19名に限られ、調査時点で既に全員が70～80歳代であった(穆曄駿 1987: 5)。

1.2. 本稿の意義

穆曄駿の調査データに含まれるバラ語の語彙は、複数の論文に散在しているため、バラ語を研究する際に重要な事例が見落とされがちである。具体例に入る前に、まず満洲・ツングース諸語の分類を概説する。Ikegami (1974: 271)は満洲・ツングース諸語をI, II, III, IVの四つの語群に分類している。Iにはエウエンキ語・ソロン語・ネギダル語・エウエン語、IIにはウデヘ語・オロチ語、IIIにはナーナイ語・ウルチ語・ウイльта語、IVには満洲語が含まれる。さらに池上(1989)は女真語をIVに追加している。本稿ではI, II, III, IVをそれぞれエウエン語群・オロチ語群・ナーナイ語群・満洲語群と呼ぶことにする。林立娟・王銘玉(2024: 124)によれば、ヘジェン族とナーナイ族は中国およびロシアに分布する同源の民族であり、

* 本稿は、中国国家自然科学基金後期資助項目「満洲支語言音系学研究」(課題番号 22FMZB009)の助成を受けた研究成果の一部である。

¹ 該当調査対象地域の地理的分布については、Hölzl (2020: 165)の地図を参照されたい。

ヘジェン族とナーナイ族がそれぞれ使用する言語はヘジェン語およびナーナイ語と呼ばれる。また、安俊(1986: 79)によれば、ヘジェン語にはキーレン方言とヘジェン方言がある。一方、風間(1996)および Kazama (1998)は、多数の実例に基づき、いわゆるヘジェン語キーレン方言(本稿ではキーレン語と呼ぶ)が音対応の面でナーナイ語群よりもオロチ語群により近いことを指摘している。さらに、Суник(1958)はナーナイ語クル・ウルミ方言(本稿ではキリ語と呼ぶ)について記述しているが、Doerfer (1973; 1975)はキリ語とナーナイ語の間には多くの相違点が存在することを指摘しており、Kazama (2024: 365)はキリ語とキーレン語の語彙はそれぞれエウエン語群とオロチ語群により近いことを指摘している。そのため、Janhunnen (2024: 4)はキリ語とキーレン語を混合言語(“mixed” languages)と呼んでいる。ナーナイ語・キーレン語・キリ語の間の差異については、Alonso de la Fuente (2011: 16)も参照されたい。以上の内容は次表のようにまとめることができる。次表にあるキリ語とキーレン語の位置付けについては Janhunnen (2024: 9)の TABLE 1.2 を参考にしている。

表 1：満洲・ツングース諸語の分類

I	エウエン語群	エウエンキ語・ソロン語・ネギダル語・エウエン語
II	オロチ語群	ウデヘ語・オロチ語
III	ナーナイ語群	ナーナイ語・ウルチ語・ウイльта語
		(混合言語)キリ語・キーレン語
IV	満洲語群	満洲語・女真語

Hölzl (2017: 99-100)は、満洲語群を更に Manchuic (JB²・WM・満洲語方言・シベ語を含む)、Balaic (女真語文語・JA・バラ語を含む)、Alchukaic (アルチュカ語を含む)の三つに下位区分し、語頭における Alchukaic *k*³ ~ Balaic *h*- ~ Manchuic *Ø*- という音対応を指摘している。その例としては、アルチュカ語 *kaɟʰa-*、バラ語 *haɟʰa-*、JA「哈察」**hača-*、JB「阿察」**ača-*、WM *aca-*「会う」を挙げている。しかし、穆曄駿によるバラ語の当該語の記録には、[*haɟʰami*]「会见」(穆曄駿 1987: 11)だけでなく、[*gaɟʰara*]「合适」(穆曄駿 1988a: 15)も存在する。後者の場合、バラ語の語頭子音は破裂音であり、前述の音対応に反する。このように重要な事例が見落とされがちな背景には、穆曄駿が記録した語彙が複数の論文に分散していることが考えられる。そこで本稿では、穆曄駿が記録したバラ語の語彙を、WM の同源語に基づいて整理する。本稿は(上)と(下)の二部から成り、(上)には A-J の語彙を、(下)には K-Y の語彙を収録する。あわせて、WM に対応する同源語を持たない語彙の語源についても検討し、これを(下)に含める。なお、参考文献についても、(上)と(下)ごとに独立した参考文献一覧を設ける。

² 本稿では、『女真訳語』乙種本・丙種本に記される女真語をそれぞれ JA, JB と略記し、満洲語文語を WM と略記する。なお、Kiyose (1977)、金啓琮(1984)、Menges (1987)、金燾方(1990)、烏拉熙春(2009)、Kane (1989)、Kara (1991)による女真語の再建音をそれぞれ K, J, M, J', W, Kn, Kr で示す。

³ この *k* は無気無声音であり、穆曄駿の記録では *k* の他に *g* の形式としても現れる(Hölzl 2017: 100)。

2. 満洲語文語に同源語を持つ語

次表は、穆曄駿によるバラ語の記録を、WM の同源語に基づいて整理したものである。

- [1] 1 列目は WM の形式とその和訳である。WM の語形と意味は、羽田(1937)、田村ほか(1966-1968)、Hauer (2007)、福田(2008)、胡增益(2020)等を参考にした。
- [2] 穆曄駿の論文では、バラ語の一部の語について対応する WM の形式が示されている。一方、穆曄駿が WM の対応形式に言及していない場合、あるいは穆曄駿が示した WM の形式が当該バラ語の同源語ではないと筆者が判断した場合には、次表第 1 列の形式は筆者による比定である。なお、Sulfa と関雲路の私信による情報提供を受けている。Sulfa (私信)および関雲路(私信)の意見は、それぞれ <S>, <G> で示す。
- [3] 穆曄駿が提示したバラ語の語形のうち、一部の要素についてのみ WM の同源要素が想定可能である一方、語形中の残りの部分に対応する WM の同源要素が存在しない、または対応関係が判断できない場合には、1 列目に「+ α」を付してその旨を示す。
- [4] 動詞については、原則として未完了形を記載する。但し、バラ語の同源語の記録が未完了形以外の形式である場合、1 列目に語幹の形式と意味を記載し、その右側に対応する形式を示す。
- [5] 2 列目はバラ語における同源語の語形とその出典である。同源語と想定される部分の語形は太字で表す。穆曄駿が記録したバラ語の語形は、基本的に IPA またはそれに近い表記と考えられるが、無気の破裂音及び破擦音については、無声音記号と有声音記号が混在している。また、原文においてバラ語の発音が漢字で記録されている場合もあるが、その場合には、拼音(ピンイン)を付す。なお、必要に応じて、穆曄駿が記したバラ語の漢語訳も併記する。
- [6] 2 列目にある出典において、「穆曄駿 19」を省略している。例えば、「(84b: 65)」は「(穆曄駿 1984b: 65)」を指す。
- [7] (Y), (FY), (BY), (S), (T), (GT), (BT)はそれぞれいわゆる「雅語」、「非変体雅語」、「変体雅語」、「俗語」、「土語」、「共性土語」、「不共性土語」を表す。これらは穆曄駿の用語であり、詳細は穆曄駿(1987: 5-21)を参照されたい⁴。(H), (W), (X), (Z)はそれぞれバラ語土語の地域名である「哈達哈」、「烏吉山」、「祥根瑪勒」、「獐光材/獐光采/獐光才」⁵を表す。
- [8] 穆曄駿(1987: 2-4)で言及されている地名・名字もバラ語の発音を反映している可能性があるが、原則として次表では扱わない。また、穆曄駿(1987: 30-31)に記述されている動詞の屈折接辞についても、原則として次表では扱わない。

⁴ 穆曄駿はバラ語において「雅語」と「俗語」を厳密に区別しているように見受けられるが、同一の語形が「雅語」と「俗語」として異なる頁で重複して記録されている例が確認される。例えば、[əʃiŋən]「鱗」は穆曄駿(1987: 10)では「変体雅語」として掲載されている一方、穆曄駿(1987: 13)では「俗語」としても記載されている(表 2 の esihe の行を参照)。また、[p'alai]「橈」は穆曄駿(1987: 9)では「変体雅語」として記載されているが、穆曄駿(1987: 12)では「俗語」としても記載されている(表 2 の fara の行を参照)。更に、語幹 [t'urgə-]「見る」については、穆曄駿(1987: 11)が [t'urgara] を「俗語」として記載している一方、穆曄駿(1988a: 15)が [t'urgamə] を「承襲雅語」としている。

⁵ 穆曄駿(1987)における「獐光材」(2, 17, 20 頁)、「獐光采」(17 頁)、「獐光才」(19 頁)は同じ地域を指すと考えられる。表 2 の「julgen sain + alin」の行を参照されたい。

表 2：満洲語文語(WM)とバラ語の同源語

満洲語文語(WM)	バラ語
aba 「巻狩り」 + da 「長」	阿布达 abuda 猎长 (84b: 65)
abala- 「巻狩りをする」 abala- + α ⁶	[alahin] 打围 (S) (87: 13)
abdaha 「葉」	[avdəhə] (BY) (87: 10)
abka 「天」	[ap'k'a] (FY) (87: 6)
aca- 「会う；合う」 acambi	[haŋ'ami] 会见 (S) (87: 11)
acara	[gaŋ'ara] 合适 (88a: 15)
adu 「服」 ⁷	[haduwə] 衣 (S) (87: 12)
afandu- 「一斉に攻める」 afanduha	阿凡都哈 afanduha (84b: 66)
aibade 「どこで、どこに」	[ai vət'] (87: 25)
aidagan 「雄の野猪」	[aidəhən] 满语为公野猪 巴拉语为野猪 (BY) (87: 9)
aina- 「何をする、どうする」 ainara	[anara] 怎么办 (87: 26)
aisin 「金」	[ant'ugun] 金 (S) (87: 11)
akdacuka 「信すべき」	[ək'dəŋk'a] (87: 15)
akjan 「雷」 ⁸	[ək'din] (BY) (87: 8) (88a: 2)
alhari 「白斑のある(鴨)」 ⁹	(Z) [alhari] 浑身被蚊虻咬伤 (BT) (87: 20)
alikū 「大皿」 ¹⁰	[anlikuə] 盆 (S) (87: 13)
alin 「山」	阿林 alin (87: 3) [alin] (87: 27)
aliyambi 「待つ」	[əilimi] (S) (87: 12)
ama 「父」	[amin] (87: 31)
amala 「後ろ」	[amala] (FY) (87: 7) [amalə] (S) (87: 12)
amba 「大きい」	[aŋ] ([aŋbielə] 江 (GT)) (87: 17) [anba] (87: 29)

⁶ ここの [hin] という要素の機能は不明である。穆曄駿のバラ語に関する記述にはこの要素に関する説明がなく、実例はこれのみである。(87: 14)には WM の geneki と同源の [ənəhi] があり、ここの [hi] は WM -ki に相当する接辞だと考えられるが、[alahin] における [hin] と同じ要素であるか否かは不明である。[hin] は WM の -kini に対応する可能性もあるが、検討の余地がある。

⁷ JA の「哈都」(漢訳=服/衣)(K 127 = *hadu; J 35, 136 = *xadu(xu) ~ *xad-xuwə; W 80 = *hadu) と JB の「阿都」(漢訳=衣)(Kn 330 = *adu)も同源語と考えられる(池上 1999b: 329; Hölzl 2017: 100)。JA の *hadu とバラ語の [haduwə] における語頭子音 h は、JB の *adu と WM の adu では脱落している。

⁸ 原文では女真語の同源語はバラ語の [ək'din] と発音が同様と記述しているが、JA, JB で「雷」を意味する「阿玷」(K 97 = *akdiyan; J 68 = *adia; W 69 = *agdian)と「阿甸」(Kn = 135, 151, 153 = *a[k]dien ~ *a[k]dian; Kr 149 = *akdian)に基づけば、第 2 音節の母音は *i ではなく *ia と再建するのが妥当である。また、孫伯君(2016: 148-149)は、人名「阿典」・「阿迭」等に基づいて、金代女真語における「雷」の発音を *adien/*adie と再建している。一方、この語のツングース諸語における同源語では、第 2 音節の母音は一般に i (または i) である(Цинцнус и др. 1975: 12 参照)。

⁹ WM alhari 「白斑のある(鴨)」とバラ語 [alhari] 「浑身被蚊虻咬伤」は意味上が異なるものの、WM alhari は alha 「花模様」 + -ri 「名詞形成接辞」に由来する語であり、後者もこれに対応する要素に由来すると考えられる。

¹⁰ (87: 28)では、[ə] はバラ語では [uə], [u], [ə] の 3 通りの発音に対応すると記されており、[anlikuə] は WM [ə] とバラ語 [uə] が対応する例と考えられる。

ambalinggū「魁偉」	[anbaliŋu] 魁伟 (87: 30)
amca-「追う」amcara	[amɕʰara], [gamɕʰara], [ganɕʰara] (88a: 16)
amjita「伯父たち」	[amaditʰa] 众伯父 (87: 29)
an「常」	[an] 永远 ([anʰgərə] 永远明亮或没有黑夜) (88a: 8)
anggara「甕」	[aŋgərə] 敞口的器物 (88a: 8)
ara「あら、おや；あー」	[əra] 哎呀 (87: 31)
ara-「作る」ararakū ¹¹	[ararɕən] 不写、不做 (88a: 11)
ari「天にまで到るといふ鬼の名」	[(ŋ)ari] ([nəməri], [nəmu ŋari] 山洞子里的魔鬼) (88a: 93) [ari] 最凶恶的魔鬼，又是泛指の称谓 (88a: 93)
atangi「いつ」	[atʰaŋniə], [antʰaŋniə], [atʰani] 什么时候 (88a: 17)
ba「場所」 ¹²	巴 ba (特苏巴，纳莫 tesu ba namo 本地人) (巴彦巴 bayan ba 富裕的地方) (84b: 66) (巴尼人 baniren 本地人) (87: 3) [ba] ([niəi ba] 水甸子 (FY)) (87: 8) ([banai] 本地人 (GT)) (87: 17) [və] ([ai vətʰ] 在那儿 ¹³) (87: 25)
baitangga「有用な」 ¹⁴	贝他哥 beitage (84b: 67)
banda mafa「獵神」	班达玛发 banda mafa 猎神 (84b: 65)
banji-「生きる」banjiha	[pardihai] 活了 (BY) (87: 8)
banuhūn「怠惰」	[panəhuən] (FY) (87: 6)
byan「富んだ」	巴彦 bayan (84b: 66, 67)
be「を」	博 bo (嘎萨博，这德瓦集嘎库 gasa bo, zhe de wajigaku 天天有吃不完的飛禽) (84b: 67) ¹⁵ [mə] (87: 27) [uə] (88a: 15)
be「私たち(排他的)」 ¹⁶	博 bo (84b: 66)
bedere-「戻る」bedereci	[pədərə kʰiə] (87: 27)
bedun「堅固な」	[pʰutʰun] (BY) (87: 8)
behe「墨」	[bəhə] (87: 22)

¹¹ [rɕən] は WM の -rakū と同源ではない。詳細は王海波(2025b: 4-6)を参照されたい。

¹² 池上(1999b: 336)によると、バラ語「巴尼」(bani)の「巴」(ba)及び [banai] の [ba] は WM ba、ナーナイ語ビキン方言 6a「天、場所」、松花江下流沿岸方言 pa「天、地」(凌純聲 1934: 273)に対応する。

¹³ ここでの「那儿」は「どこ」を意味する。通常「哪儿」と表記される。

¹⁴ 原文は「拉不道班贝他哥」(labu daoban beitage)である(漢訳=用不尽)。Hölzl (2021: 177, 187)は WM の labdu daban ?baitangga と対応するとしているが、この解釈については検討の余地がある。beitage については、Sulfa (私信)が baitakū (漢訳と意味が合わないが)か baitalaha (la が欠如するが)に対応する可能性を提示している。

¹⁵ (87: 26)には、バラ語の対格は通常省略され、ほとんど [pə] のように発音されないという説明がある。一方、(84b: 67)には「嘎萨博」(gasə bo)の例があり、ここでの「博」(bo)は対格標識と考えられ、母音の実際の音値は [ə] である可能性が高い(拼音 be の漢字はないため)。

¹⁶ 原文は「玛法哩，古鲁吉朝哈德，阿凡都哈博，乌巴德，特苏巴，纳莫，木德，木必」(mafali, guluji [sic] chao ha de, afandu ha be, wubade, tesu ba, namo, mude, mubi)である(漢訳=祖先们同野兽兵丁作战，我们才成了本地人)。Hölzl (2021: 176, 186)はこの「博」を対格標識の be と解釈している。一方、Sulfa (私信)によると、この「博」は漢訳の「我们」に対応する。筆者は Sulfa の見解を支持する。その根拠として、「博」の直後の読点「，」をその前に移動すれば、原文の漢訳「我们」との対応関係が明らかになる。原文における読点は、必ずしも漢語の読点と同一のものとは限らず、当該箇所は歌詞の一部であるため、歌唱上の間を置く箇所を示している可能性がある。

bethe 「足；脚」	(fatha の行を参照)
beye 「体」 ¹⁷	[bəi] 人 (GT) (88a: 20)
bigan 「野原」	[bigan] 野原、野甸子 (88a: 9)
bi 「私」	[mi] (87: 26) [bi] (88a: 13)
bi- 「ある、いる」 bi	[bi] (88a: 13)
bihe	[biə] (87: 25) [bie], [bi'ə] (87: 30)
bira 「川」	[pira] (FY) (87: 6) [mie] ([nalin mie] 拉林河) (87: 16) [bielə] ([aŋbielə] 江 (GT)) (87: 17) (cargi bira の行も参照)
bithe 「本」	[bit'ihə] (FY) (87: 7)
biya 「月」	[pija] (FY) (87: 6)
biyandu 「隠元豆(漢語扁豆)」	[biandu] 扁豆 (87: 23)
boco 「色」+fiyan 「顔色；紅；色」 ¹⁸	[buot'ijan] 顔色 (87: 29)
bolgo 「清潔」	博老 bolao 清清的 (84b: 67)
boo 「家、家屋」	博 bo (博依达苏苏 bo yi da susu 故乡) (84b: 66) [bɔɔ] ([mɔŋgɔ bɔɔ] 蒙古包 (FY)) (87: 8) ([jəlu bɔɔ] 地窖子房 (GT)) (87: 18) [pɔɔ] (87: 26) ¹⁹
borhoto 「荊條墩(樹名)」	[bɔrhɔdɔ], [bɔhɔdɔ] 棘条墩子 (重音在词中元音) (88a: 12)
boso 「布」	[busu] (87: 22)
bu- 「与える」 buhe bihe ²⁰	布必赫 bubihe (84b: 66-67)
buce- 「死ぬ」 bucehe	[put'ihə] (BY) (87: 8)
bujan 「林」	[p'utʃa] (S) (87: 13) [p'utʃa] 仆察 pucha, [fuʃa] 仆札 puzha (88a: 7)

¹⁷ WM における同源語 beye は主に「体」を意味し、「人間」の意味を持たない。一方、アルチュカ語の [na bəi] 「当地の人」における [bəi] は「人」を意味し(穆曄駿 1987: 17)、池上(1999b: 336)はナーナイ語クル・ウルミ方言(キリ語)における同源語 6ɔjə 「人間」とアルチュカ語の [bəi] が一致していると指摘している。池上(1999b)はアルチュカ語とバラ語の両方を研究対象としているが、上記の対応関係を論じる際に、バラ語の [bəi] 「人」には言及していない。

¹⁸ (87: 29)では、[buot'ijan] における [jan] は色彩を表す接辞であると記述している。この接辞が付加されて形成されたバラ語の色彩語は他にもいくつか存在する。この [jan] の語源については、2つの可能性があると考えられる。第一に、WM fiyan 「顔色；紅；色」の同源語に由来する可能性がある。第二に、WM において色彩を表す語のうち、fulgiyan 「赤」、niowanggiyan 「緑」、sahaliyan 「黒」、suwayan 「黄色」、šanggiyan/šanyan 「白」、šeyen 「純白」などのように、yan~yen で終わる語が複数存在する点が挙げられる。これらの語に含まれる yan~yen は、共時的には独立した形態素として抽出することが困難であるが、語源的にはバラ語の [jan] と関係が存在する可能性も否定できないと考えられる。

¹⁹ 穆曄駿の記録では、無気の破裂音および破擦音について、無声音記号と有声音記号が混在して用いられている(2. 節の [3] を参照されたい)。

²⁰ 原文は「德更格哈达哪，泯博，胡鄙哩，布必赫」(degengge hada na, minbo hubili [sic], bubihe)である(漢訳=那高高的山峰给了我们幸福)。Hölzl (2021: 177, 187)はこの「布必赫」(bubihe)は WM の bu-bihe に対応する述べている。しかし、Sulfa (私信)が指摘しているように、bu-bihe は文法的に問題があり、buhe bihe に訂正する必要がある。

buju-「煮る」buju ²¹	[muk'ɕu] 煮 (87: 23)
bultahūn「盛り上がった；顕」<S> ²²	布季(buji) 頂子 (87: 2) 祥根瑪勒布季山 xianggen male buji shan 冷帽頂子山 (87: 2) 祥根瑪勒布季 xianggen male buji (87: 17) 鮮根瑪勒布季 xianggen male buji (87: 19) [buɕi] 高山尖 (S) (87: 13)
buncuhūn「水等が冷たくもなく熱くもない」<S> ²³	[buɕ'uhun] 温 (S) (87: 13) [pənt'uhun] 温暖 (GT) (87: 18)
burga「柳の木；柳の枝」	[p'uga] 柳 (S) (87: 11) [p'ugan] 柳条 (88a: 8) [p'uhan] 柳条 (88a: 9) [p'uga], [p'ugan] 柳条 (88a: 18)
burga「柳の木；柳の枝」+ -tu「名詞形成接辞」	[p'uhāt'u] 柳条墩 (88a: 9)
bušuku「狐の精」	[buciu] 魔鬼、规范語謂狐魅 (GT) (87: 17)
cacari「布製の四角な天幕」	[ɕiɕ'iri] 帳棚 (88a: 6) [ɕiɕ'irin] 帳棚 (88a: 10)
cai「茶」	[ɕa] (87: 22)
cargi「彼方」<G> + bira「川」 ²⁴	才依密勒 caiyimile 阴阳界河 (87: 4)
cecike「小鳥」	[t'it'igə] (S) (87: 14)
ceku「ぶらんこ」	[ɕik'u] (BY) (87: 10)
ci「より」	其 qi (84b: 67) ²⁵ [t'i] (87: 27, 28) [t'in], [k'ia], [ɕia], [ɕi], [ɕi] ²⁶ (87: 27) ²⁷

²¹ 原文では WM の buju に対応するとしているが、Sulfa (私信)は muke「水」+漢語「煮」(zhu)に由来する可能性を提示している。特に、原文ではバラ語の [muk'ɕu]「煮」と ([ɕ'ɔla]ではなく) [ɕ'ɔ]「炒」を併記していることから、[muk'ɕu]における [ɕu]は漢語の「煮」に由来する可能性が示唆される。

²² Sulfa (私信)はバラ語の「布季」と WM bultahūn (『大清全書』での漢訳=努出眼睛)と比較している。また、bulca「盛り上がった肉塊」、buljan「腫物」も bultahūn と同源の可能性があると指摘している。

²³ 原文(87: 13, 18)では WM の bulukan「ぬるい」に対応するとしているが、Sulfa (私信)はバラ語の語形は WM の buncuhūnの方に近いと指摘している。拙論王海波(2025a: 242)では、アルチュカ語の [buɕ'uk'an]「温」(87:13)及び [put'uhə]「温暖」(87:18)を WM の bulukanに対応するものとしていたが、本稿における検討を経て、これらもむしろ WM の buncuhūnの方に近いことが判明した。

²⁴ バラ語「才依 caiyi」と WM cargi、バラ語「密勒 mile」と WM biraの語源的関連性は、関雲路(私信)と筆者の推測である。また、査読者は WM sain + biraに対応する可能性を提示している。

²⁵ 原文は「西布苏其沾春」(xibusu qi zhanchun)であり、対応する WM は hibusu ci jancuhūnと考えられ、意味は「蜂蜜より甘い」のはずである。一方、原文の漢訳は「象蜜甜」(蜜のように甘い)である。

²⁶ 奪格(原文では「由格」)の発音 [ɕi]について、原文(87: 27)ではバラ語の [t'i], [t'in], [k'ia], [ɕia], [ɕi]の5形式を「固定」の発音と、[ɕi]を「不固定」の発音として区別している。また、アルチュカ語の奪格 [ɕi]は「固定」の発音であり、バラ語とはこの点で異なると強調している。

²⁷ 原文(87: 27)では、バラ語の奪格(原文では「由格」)を説明する際に、[ai alin mə dəɕit'in pədərək'ia mənə]「这个山进去出来都很难」という例文を挙げ、同例における [t'in]と [k'ia]を「由格」としている。しかし、これらはいずれも明らかに格標識ではなく、条件連用接辞である。即ち、原文では奪格標識と条件連用接辞が混同されている。WMにおいて両者はいずれも ciという形式をとるものの、共時的には異なる形態素であり、通時的にも起源を異にする。[1] 奪格標識 ciは、*tiに遡る形式である。JAには「ト温失刺哈替」(漢訳=自古)(K 138 = *bun širahati; J 15, 107, 197, 209 = *bu-un šira-xa-ti)という表現があり、このフレーズでは語順転換が認められる(Kiyose 1977: 138)が、ここに見られる *tiは奪格標識と解釈される(金光平・金啓琮 1980: 212では「従格」と称されている)。[2] 一方、条件連用接辞 ciの語源について、池上(1999a: 260-266; 1989: 1081)はツングース諸語との比較から、ciは接辞 -raと -kiの結合に由来すると指摘している。即ち、条件連用接辞 ciにおける cは、rk > cという音変化の結果生じたものである。

cira 「(角力で)隙がない」	[ɕira] 密实 (88a: 10)
coko 「鶏」	[tʰihə] (S) (87: 11)
cola- 「煎る、炒める」 co(la)	[ɕʰɔ] (87: 23)
cooha 「兵、軍」	朝哈 chaoha (84b: 66) 超合 chaohe (84b: 66; 87: 3)
cungguru 「へそ」	[ɕʰiungguru] (BY) (87: 10)
curhū 「かもぐちの幼魚」	珠赫 zhuhe 狗鱼崽子 (87: 3)
da 「もと ; 草木の根本 ; 首領」	达 da (阿布达 abuda 猎长) (达乌克墩 da wukedun 供奉神靈的乌克墩) (垛勒达 duole da 买卖长) (84b: 65) (达苏苏 da susu 故乡) (84b: 66) (达苏苏 da susu 家郷) (84b: 67) [da] 根; 头 (88a: 24)
daban 「過度」 ²⁸	道班 daoban (84b: 67)
dari 「毎」	达力 dali (依能吉达力 yinengjidali 天天) (84b: 67)
dagila- 「準備する」 dagila	[dagila], [daɕila] (88a: 10)
dahū 「皮衣」 ²⁹	[dahu] 皮袄 (FY) (87: 8) 野兽皮作的皮袄 (87: 29)
dalgan 「塊」	[darga] 块、菜肉块 (BY) (87: 9)
dalin 「川岸」	[dalin] (FY) (87: 8)
danambi 「掌りに行く」	[danambi] 管事 (FY) (87: 8)
de 「に ; で」	du 于格 (84b: 66) 德 de (古鲁吉朝哈德, 阿凡都哈 gulugu chaoha de afanduha 同野兽兵丁作战) (乌巴德 wubade) (84b: 66) 得 de (窝的得 wodi de 山林中) (84b: 67) [tʰ] ([ai vətʰ] 在那儿 ³⁰) (87: 25) (87: 26) [də], [nə] (87: 26, 27) [dɔ], [du], [d], [tʰɔ] (87: 26)
defu 「漢語豆腐」	[dəpʰə], (H) [dərfuɔ] (87: 5) [dərfu] (87: 22) [dəfu] (87: 23)
defu 「漢語豆腐」 + 漢語の「皮」	[dəpʰəpʰi], (H) [dərfuɔpʰi] (87: 5)
deken 「やや高い」 ³¹	[dəʰəŋkʰən] 略高 (87: 30)
den 「高い」 ³²	[dəʰən] (FY) 高 (87: 8) [dəgən] 高 (87: 29)
den 「高い」 + -ngge 「～的な」 ³³	德更格 degengge 高高的 (84b: 66)

²⁸ 原文は「拉不道班贝他哥」(labu daoban beitage)である(漢訳=用不尽)。Hölzl (2021: 177, 187)は WM の labdu daban ?baitangga に対応しているが、この解釈については検討の余地がある。

²⁹ (87: 29)ではバラ語の [dahu] の [hu] は接辞であると記述している。しかし、WM の同源語 dahū はモンゴル語からの借用語である(Цинциус и др. 1975: 192; Rozycki 1983: 80)。

³⁰ ここでの「那儿」は「どこ」を意味する。通常「哪儿」と表記される。

³¹ den の行の脚注で示しているとおり、JA において「高い」を表す「忒革」は2音節語である。バラ語の「高い」は [dəʰən] ~ [dəgən] であり、JA と同様に2音節の形式をとる。「やや高い」を意味するバラ語の [dəʰəŋkʰən] (87: 30)は、[dəʰən]「高い」に派生接辞 [kʰən] が付加されて形成された語と考えられる。[dəʰəŋkʰən] における [dəʰəŋ] の部分は WM den と対応し、[kʰən] の部分は WM -ken に対応すると考えられる。

³² バラ語の「高い」は2音節の [dəʰən] (87: 8) ~ [dəgən] (87: 29)であり、[dəgən] の [gən] は派生接辞ではなく(87: 29)、語根の一部である。[dəʰən] ~ [dəgən] は WM の den と同源関係にあると考えられる。JA における同源語「忒革」(漢訳=高)(K 113, 135 = *tege; W 72 = *dəga)も、母音間の g を保持している(Hölzl 2021: 182)。また、「やや高い」を意味するバラ語の [dəʰəŋkʰən] (87: 30)は、[dəʰən]「高い」に派生接辞 [kʰən] がついて形成された語と考えられる。

³³ den の行の脚注で示しているとおり、JA において「高い」を表す「忒革」は2音節語である。バラ語の

dere 「顔；机」	[dərə] 脸、桌子 (FY) (87: 7) 脸 (88a: 93)
dere 「顔；机」 + enduri 「神」	[duduri], (X) [dərnduri] 跳神用的面具 (88a: 93)
dobi 「狐」	[dərpiə] 狐 (FY) (87: 7) [dərbi] (87: 14)
dobih 「狐の毛皮」	[dərpihi] 狐皮 (S) (87: 11)
dobori 「夜」	[dələbə] 夜 (GT) (87: 17)
doko 「近道」 + -nggo 「～的な」	[dək'əŋgə] 走抄道的 (87: 30)
dondon 「蝶々」	[dəndən] 小蝴蝶 (FY) (87: 8)
dondon 「蝶々」 + -ri 「名詞形成接辞」	[dənduri] 蛾子 (GT) (87: 18)
donji- 「聴く」 donjire	[dərdirə] (S) (87: 11) (87: 14; 88a: 2, 22) [dəndirə] (87: 14; 88a: 2 ³⁴ , 22)
dorgi 「内」	[dərje] (87: 26)
dosi- 「入る」 dosici	[dəfɪt'in] (87: 27)
duka 「ゲート」	[durk'a], [durk'ai] 院子的大门 (88a: 20)
durge- 「震える」 + α <G>	(X) [dulgəjen] 冻死鬼 (BT) (87: 21)
duri 「揺り籠を兼ねた乳母車」	[duli] (FY) (87: 8)
ecikese 「叔父たち」	[ət'ik'əts'ə] 众叔父 (87: 29)
efen 「饔飩(食物の名)」	[gəbe] 饔飩 (87: 22)
eihen 「驢馬」 + -ngge 「～の(ある)」	[əihəŋgə] 骑驴的 (87: 30)
ejembi 「記す；覚える」	[əfjimeil], [ənfjimeil] 記事之记 (88a: 17)
ekiyehun 「欠乏した」	[ək'ihun] 缺少 (87: 30)

「高い」は [də'an]～[dəgən] であり、JA と同様に 2 音節の形式をとる。「徳更格 degengge」における dege の部分は WM den と対応し、ngge の部分は WM -ngge に対応する可能性が高い。また、Hölzl (2021: 177, 187) も、「徳更格」(degengge)は WM の dengge に対応している。WM dengge の意味については、Hölzl (2021: 177)は Norman (2013: 73)の記述(即ち glorious と distant, far away という 2 つの意味)を引用すると同時に、high の意味もあると推測している。しかしながら、Norman (2013: 73)における dengge の distant, far away の語義は誤りであろう。『増訂清文鑑』には dengge 「往遠撤」(動詞 denggembi 「遠くに投げる」の命令形)が記載されているが、Norman はこれを形容詞と誤認している。『新満漢大詞典』第 1 版(胡增益 1994: 180)では dengge の語義として「①远处的, 远远的。②高贵的, 荣耀的。③封溢用语; 荣。」を挙げているが、①の語義も同様の誤解に基づく。同辞典第 2 版(胡增益 2020: 292)では、①と②の語義が削除されている。「榮」の意味の dengge は、den 「高い」に派生接辞 -ngge が付いて形成された語である可能性があるが、Sulfa (私信)は derengge 「体面」に由来する可能性もあると指摘している。『大清全書』における derengge の漢訳は「有体面」の他に、「榮」もある。

³⁴ (88a: 2)は、WM の donjire (語幹 donji- 「聞く」に未完了連体接辞 -re が付いた形式)に対応する女真語の発音は、バラ語の発音と同様の [dəndirə] であると述べている。しかし、『女真文辞典』(金啓琮 1984: 217)には女真語の語幹 *donji- は収録されているものの、これに接辞 [rə] が付いた形式は見られない。また、JA と JB における該当語幹の漢字音写は、それぞれ「端的」と「斷的」であるが、ここで第 1 音節の音節末子音(coda)は *n ではなく *l であった可能性も否定できない。当時の漢語には l 韻尾の音節が存在せず、l 韻尾の発音を表記するために n 韻尾の漢字を代用した可能性があるからである。Ligeti (1953: 223)は、ナーナイ語の dolje-, dold'i- を考慮し、JA 「端的」の発音を *doldi- と再建している。烏拉熙春(2002: 264)も同様に *doldi- と再建している。なお、烏拉熙春(2002: 10, 123)は、女真語で「聞く」を意味する語幹を表す女真字「𐰺」は契丹小字の「𐰺」*tur を模倣して作られたと論じている。この契丹字は、契丹語で「生む」を意味する語「𐰺𐰺」*tur-gən において語頭字として用いられている。この字が女真文に借用された後、発音が近い *dol を表すようになったという。しかし一方で、李思齊(2021: 90)は契丹字「𐰺」の音価は *[sui] であったと指摘している。

ekše-「忙しい」 ekšembī	[əkʰuʃəmi], [əkʰʃəmi] 忙 (88a: 18)
ekšere + erin「時」	[əkʰuʃərin] ([həŋ əkʰuʃərin] 大忙季节) (88a: 18)
elu「葱」	[ɔlɔ] 山葱或葱 (88a: 6)
empi「あかざ」	[umpʰi] 柳蒿芽菜 (88a: 6)
encu「別の」	[əntʃʰu], [gəntʃʰu] (88a: 16)
enduri「神」	恩都力 enduli (84b: 65; 87: 4) [ənduri], [gənduri] (88a: 19) [ənduri], [nduri] ([duduri], (X) [dərnduri] 跳神用的面具) (88a: 93)
ere「これ；この」	俄勒 ele (84b: 66) [ər] (87: 26) [əi] (87: 27; 88a: 22)
erguwe-「圍繞する」+ -ri「名詞形成接辞」 <S><G>	[əlquəli] 蜘蛛网 (87: 28)
erhe「蛙」+ -ri「名詞形成接辞」	[ərgəri] 森林田鸡 (87: 28)
erin「時」	(ekšere + erin の行を参照されたい)
esihe「鱗」	[əʃigən] (BY) (87: 10) (S) (87: 13)
etuku「服」	[ətʰuhuə] 外衣, [ətʰukʰu] 内衣 (88a: 21)
fahi「内股」+ giranggi「骨」/ giran「死骸」	[pʰahiran] 胯骨裆 (88a: 11)
faisha「木柵」	[pʰaitsga] (S) (87: 12)
faju「樹や指の股」+ yen「羊腸の山道」 <S>	[patʃujan] 野兽走的三叉道 (87: 29)
fangkala「低い」	[pʰaŋgə] (S) (87: 13) [pʰaŋkʰa] (87: 29)
fangkalakan「やや低い」	[pʰaŋkʰakʰan] 稍低 (87: 30)
fara「橇」 ³⁵	[pʰalai] 雪橇、车辕 (BY) (87: 9) 爬犁 (S) (87: 12)
farhūn「暗い」/ fahala「暗紫色」+ fiyan「顔色；紅；色」 ³⁶	[pʰanjan] 暗色 (87: 29)
fatha「蹄」/ bethe「足；脚」 ³⁷	[pʰatʰi] 脚 (GT) (87: 18) [batʰi] 兽掌、蹄 (GT) (87: 18) [pʰətʰiʷ], [pʰətʰi] 脚 (88a: 14)
fathangga「蹄のある」/ bethengge「足/脚のある」	[pʰatʰiŋ], [pʰatʰhaŋ] 有脚的 (88a: 18)
fe「古い」	[fə] (FY) (87: 7)

³⁵ バラ語の [pʰalai] は WM の fara i「橇」に対応する形式である可能性は排除できない。ただし、バラ語には音変化で語末の [a] の後に [i] が挿入される例がある(例えば、88a: 20 が指摘する音変化の例 [durkʰa] > [durkʰai] など参照されたい)。このため、[pʰalai] の [ai] は、[a] が音変化した結果である可能性もあると考えられる。

³⁶ [pʰan] の部分と WM の farhūn / fahala との語源的関連性はそれぞれ筆者と Sulfa (私信)の推測である。

³⁷ (87: 18)は、WM の bethe と fatha に対応するバラ語の同源語はそれぞれ [pʰatʰi] と [batʰi] であると記述している。一方、バラ語の [pʰatʰi] の派生語と考えられる [pʰatʰiŋ], [pʰatʰhaŋ]「足のある」に対応する WM の同源語について、(88a: 18)は [fatʰhaŋgə] (fathangge)と記述し、bethengge には言及していない(fathangge は正しくは fathangga であろう。『増訂清文鑑』には nunggari fathangga kuwecihe の例で確認できる)。また、(87: 19)は、WM の bethe と fatha は元々同じ語であったと述べている。

fejilen 「鳥を捕る罟」	[p'əidilən], [p'idilə] 打鸟的套子 (88a: 22)
feliye- 「歩く」 feliye ³⁸	[fəilijə], [filiə], [fəlijə] 走或走吧 (88a: 6)
feshen 「蒸籠」	[p'əshən] 笼屉 (87: 29)
fī 「筆」	[pi] (87: 22) ³⁹
fiya 「樺」	[p'ijə] 臭桦 (87: 29)
fiya 「樺」 + -ku 「名詞形成接辞」 ⁴⁰	(H) [fiegū] (T), (Z) [p'irguə] (T) 桦皮 (87: 17)
fiyana 「背負子」	[fijana] (FY) (87: 8)
fiyoose / fiose 「瓢を縦半分に分けて水を汲むのに用いた用具(漢語瓢子)」 + -ri 「名詞形成接辞」	[p'ətsəli] 水瓢 (88a: 25)
fodo 「薩満祈祷時の柳枝」	[fədə] 吉祥柳枝 (88a: 6)
fodo mama 「柳枝祖母」(宋和平・孟慧英 1997: 16)	佛头妈妈 fotou mama (87: 4) ⁴¹ [fədə māmə] 吉祥奶奶 (88a: 6)
fodo 「薩満祈祷時の柳枝」 + moo 「木」	佛斗冒 fodoumao (87: 3)
fodoho 「枝垂れ柳」	[p'ədhe] 柳树 (BY) (87: 10) [fədəhə] 柳树 (88a: 6)
fucihi 「仏」	[p'utihin] (S) (87: 12) [p'it'ihin], [p'ut'ihin], [fut'ihin] (88a: 7)
fucihiyala- 「炙る」 + -ri 「名詞形成接辞」	[puk'iali] 夏季狩猎时带的食物, 火爆肉 (GT) (87: 18)
fucihiyambi 「咳をする」	[p'ut'ihiaŋmi] (BY) (87: 9)
fuhen 「火口に用いる草」 + -yen 「名詞形成接辞」 ⁴²	[fəihəjən] 引火用的干草 (87: 29)

³⁸ WM feliye- とバラ語の同源語は共に語頭子音が f であるが、元々は *p であったと考えられる。ナーナイ語の пули- (Оненко 1980: 342 に収録) も WM feliye- の同源語と考えられる。また、明代女真語における同源語について、JA には「弗里隨」(K 143 = *fulisuwi; J 25, 119, 180, 250 = *fuli-sui; W 78 = *fuli-sui)、JB には「伏力速」(Kn 306 = *fulisu)があるため、明代女真語では *p > f が既に発生していることがわかる。また、von Zach (1897: 107) は JA の「弗里隨」をナーナイ語の pulsi- 及び WM の feliye- と比較している。

³⁹ Hölzl (2018a: 32) は (87: 22) に記録された [pi] 「筆」を引用する際に、p(ʼ)i のように表記し、語頭子音が有気音である可能性を示唆している。これはおそらく、アルチュカ語の [p'i] 「筆」(87: 22) に基づく推測であろう。しかし、語源となる漢語「筆」の語頭子音は無気音であるため、バラ語の [pi] の語頭子音も無気音である可能性は十分あると考えられる。

⁴⁰ バラ語の [fiegū] は、WM fiya + -ku に対応する要素で形成されたと考えられる。バラ語の [p'irguə] における [p'i] も WM fiya に対応すると考えられるが、[rguə] の部分については、Sulfa (私信) によると、alhūwa 「横隔膜」や derhuwe 「蠅」などに共通の RhUwA (R = r/l, U = ū/u, A = a/e) の部分が見られ、共時的には形態素として抽出することが困難であるが、語源的には [p'irguə] の [rguə] と関連している可能性がある。

⁴¹ 原文の記述によれば、旗人とバラ人が祀る神は異なり、旗人が祀る最高の祖先神は「佛头妈妈」であるのに対し、バラ人が祀る最高の祖先神は「乌什哈妈妈」である。つまり、「佛头妈妈」は旗人の信仰に由来する神である。従って、その名はバラ語の発音ではなく、WM の発音を反映したものである可能性が高い。

⁴² バラ語 [fəihəjən] における [fəihə] の部分は WM fuhen と同源である可能性が高い。また、[jən] の部分は WM の名詞形成接辞 -yAn (A = a/e/o) に対応する可能性がある。WM -yAn の例としては、uhū-yan 「挟りとられて窪んだ所」、šofo-yan 「心の狭い」などが挙げられる。uhū-yan は uhū- 「挟りとる」 + -yan で形成され、šofo-yan における *šofo- は šoforo- 「つねる、つまむ」などと関連する可能性がある。

fuhu 「疣」 + -yen 「名詞形成接辞」	[fuhujən] 懒疙疸 (87: 29)
fujuri 「根基 ; 世襲」	[fuʃilən] 体面或像样 (88a: 21)
fujurakū 「行儀の悪い」	[pʰuʃilərfən], [pʰidiləzfən] 举止没人样 (88a: 21) [pʰidiləzfən], [pʰuʃilərfən], [pʰudiləzfən] 不成样子 (88a: 22)
fukana- 「泡ができる」 fukanaha ⁴³	[pʰukʰanagai], [pʰukʰənagai], [pʰukʰnagai] 起了泡了 (88a: 13)
fuktala 「蕨」	[pʰutʰərə] (S) (87: 13) [pʰukʰtʰala], [pʰuʰətʰala] (88a: 22)
fulenggi 「灰 ; 灰色」 + fiyan 「顔色 ; 紅 ; 色」	[fuləŋjan] 灰色 (87: 29)
fulgiyan 「赤」	[pʰulʃian] (87: 15) [fəlijan] (87: 29)
fuli 「乾し肉」	[fuli] 碎干肉块 (FY) (87: 7)
fungkū 「丸太」	[fuŋkʰʷ] 墩子 (FY) (87: 7)
funiyehe 「髪 ; 毛」 ⁴⁴	[piniergə] 发 (S) (87: 11)
funiyehengge 「毛のある」	[pʰiniəhəŋə] 带毛的 (87: 30)
furdehe 「毛皮」	[pʰurduhu] 毛皮 (87: 29)
furgin 「辛い」	[pʰulʃin] 辣 (87: 15)
furgin 「辛い」 + -hun 「名詞形成接辞」	[pʰəgihun] 辣味 (87: 29)
furun 「削り取った肉」	[pʰurun] 丝、菜肉丝(BY) (87: 9)
fusa 「菩薩」	[pʰusə], [fusə] (88a: 7)
futa 「縄」	[futʰə] (FY) (87: 6) ⁴⁵ [fətʰə] (88a: 6)
gajimbi 「持ってくる」	[gaʃʃimi], [gantʃumi] (88a: 17)
gala 「手」	[ŋala] (BY) (87: 8)
galman 「蚊」	[galman] (FY) (87: 8)
garun 「股まである長靴」 + -hū 「名詞形成接辞」	[galuhu] 熊皮长靽靴 (87: 29)

⁴³ [pʰukʰanagai] などにおける [gai] は WM-hai 「～しつ」に対応する形式である可能性は排除できない。ただし、バラ語には音変化で語末の [a] の後に [i] が挿入される例がある(例えば、88a: 20 が指摘する音変化の例 [durkʰa] > [durkʰai] など参照されたい)。このため、[pʰukʰanagai] などにおける [gai] は、[ga] が音変化した結果である可能性もあると考えられる。また、ここの [i] は、シベ語の /i/ のようなモダリティ接語(この接語については児倉 2018: 17 を参照)ではないと考えられる。アルチュカ語の [ʃəkʰəi] (88b: 11; 王海波 2025a: 253)も参照されたい。なお、バラ語のこの語は原文では「重音前失音」の例として挙げられているため、アクセントが [na] にあると判断される。

⁴⁴ Hölzl (2017: 101) はバラ語 [piniergə] における [p] は有気音の [pʰ] であると推測している。Hölzl (2018a: 21) でも、[piniergə] の代わりに pʰ(iniergə) のような表記をしている。Hölzl (2017: 101; 2018a: 21) は (87: 30) が記録した [pʰiniəhəŋə] の語形に言及していないが、この [pʰiniəhəŋə] は WM funiyehe の派生語 funiyehengge に対応すると考えられ、語頭が有気音である点は Hölzl の推測と一致する。

⁴⁵ (88a: 6) は、バラ語における [u] から [ə] への音変化の例として [futʰa] > [fətʰə] を挙げ、「巴拉人的习惯语发声皆为 [fətʰə]」と説明している。しかし、(87: 6) には [futʰə] が記録されており、こちらに [u] > [ə] の音変化が生じていない。

gasha 「鳥」	嘎萨 gasa (84b: 67)
gasihyambi 「人を損じてその財を取り上げる」 <S>	[gæcimi], [gancimi] 浪费 (88a: 17)
gebu 「名」	[gərbi] (S) (87: 14) [gəbi], [gərbi] (88a: 17)
gefehe 「蝶」	[gəfihə] 蝴蝶 (BY) (87: 9) [k'əfəi] 大蝴蝶 (GT) (87: 18) [k'əfəi], [k'əwəi] 大蝴蝶 (88a: 2) ⁴⁶
geji 「鳥を捕らえる罟」	改金 gaijin 夹子 (84b: 65)
gene- 「行く」 gene(mbi) ⁴⁷	[ənə] (ei ənəŋə 你去么) (87: 31)
geneki	[ənəhi] (87: 14)
generakū ⁴⁸	[ənərʃən] (88a: 11)
genggiyen 「清い、明るい」	[gəjən] 明色 (87: 29)
geo morin 「雌馬」	[k'uə məri] (87: 22)
gere- 「空が明るくなる」	[gərə] 明亮 ([an'gərə] 永远明亮或没有黑夜) (88a: 8)
geri 「伝染病、流行病」	[gailin] (S) (87: 12)
gida 「槍」	吉达 jida 矛枪 (84b: 64-65)
giogin 「掌」	[giogin] (FY) (87: 6)
giran 「死体」	[gira] 尸体 (88a: 10)
giranggi 「骨」 ⁴⁹	[k'ijamu] 膝盖骨 (GT) (87: 17) [dijanmusu] 骨头 (GT) (87: 17)
girikū 「裁断用の小刀」	[gilik'u] 猎人随身带的割刀 (87: 29)
girimbi 「切り揃える」	[gilimi] 割草 (FY) (87: 7)
giyahūn 「鷹」+ -han 「名詞形成接辞」	[gijahuhan] 捕鷹网 (87: 29)
giyangdu 「ささげ(漢語豇豆)」	[giaŋdu] (87: 22)
giyarimbi 「巡察する」	[gialimi] (FY) (87: 7)
gosihon 「苦い；苦味」	[gəʃihən] 苦味 (87: 30) [guʃihun] 苦味 (88a: 6)
gurgu 「獣」	古鲁吉 guluji [sic] (古鲁吉朝哈 guluji [sic] chaohe 野兽兵) (84b: 66) ⁵⁰ 古鲁古 gulugu 走兽 (84b: 67) 勾古 gougu (勾古超合 gougu chaohe 野兽兵) (87: 3) [ulgu] (S) (87: 13)

⁴⁶ 原文では、女真語における同源語を漢字音写で「叩畏」と記し、バラ語の [k'əwəi] と発音が同様と述べている。しかし、JB の漢字音写「革迫」(Kn 230 = *gepo) が反映する発音はそれとは異なる。なお、JA には同源語が記録されておらず、Цинциус и др. (1975: 183) にもツングース諸語の同源語は収録されていない。

⁴⁷ WM の gene- は語頭の g があるが、キーレン語の同源語 ənə- (安俊 1986: 22; Zhang et al. 1989: 120)、ナーナイ語の同源語 энэ- (Оненко 1980: 532)、バラ語の同源語 [ənə] のいずれも語頭の g がない。この比較については池上(1999b: 335)及び Hölzl (2015: 135) も参照されたい。また、ツングース諸語におけるその他の同源語については、Цинциус и др. (1975: 669-671) 及び風間(1998: 62) を参照されたい。

⁴⁸ [rʃən] は WM の -rakū と同源ではない。詳細は王海波(2025b: 4-6) を参照されたい。

⁴⁹ キーレン語の giams(ə) 「骨」との語源的関連性は筆者の推測である。キーレン語のこの語については、安俊(1986: 8, 12, 29, 74) や Zhang et al. (1989: 26, 100, 122) を参照されたい。ナーナイ語の гирмакса 「骨」(Оненко 1980: 107) も同源語であるが、語形が異なる(風間 1996: 124)。Цинциус и др. (1975: 154) によれば、ナーナイ語のこの語と WM の giranggi は同源語である。

⁵⁰ 原文の「古鲁吉」(guluji) は「古鲁古」(gulugu) の誤植である可能性がある(Hölzl 2021: 175)。

gurumbi 「摘む」	[gurɔ̃mi] (88a: 6)
gurun 「国」	[guɔ̃ru] (87: 22)
guwafu 「杖」	(W) [gwaivə], (H) [gaifu] 上山用的拐棍 (BT) (87: 20)
guwafu moo 「武器用の棍棒」	(X) [gaimɔ̃], (Z) [gaimɔ̃] 上山用的拐棍 (BT) (87: 20)
hacin 「件、項、種」	[hat'in] 物件 (S) (87: 11) (87: 14) 物件 (88a: 2 ⁵¹ , 10) [huɥ'in], [hak'in] 物件 (88a: 10)
hacuhan 「小さな鍋」	汉楚 hanchu 小锅 (84b: 65) [hanɥ'u] 猎锅、小锅 (BY) (87: 10) ([lak'ia hanɥ'u] 吊锅 (BY)) (87: 10)
hada 「峰」	哈达 hada (84b: 66) [hada] ([hada mɔ̃] 山顶积水或天池) (88a: 26)
hada 「峰」 + omo 「池」	[hada mɔ̃] 山顶积水或天池 (88a: 26)
hadahan 「杭(くい) (hadahan nisiha 「船の釘に似た形の魚」)	哈达海 hadahai 木头橛子; 大鲦条鱼 (87: 3) 哈达哈 (87: 5, 17, 20)
hafan 「官」 + ordo 「亭式宫殿」 ⁵²	[havə ɔldɔ̃] 衙署 (S) (87: 13)
hafirakū 「毛抜き ; 蟹の螯」 ⁵³	[haifugu] 打野兽的夹子 (87: 28)
hailan 「榆の木」	[hailin] 榆 (BY) (87: 10)
hailun 「獺 ; 獺の皮」	[harui] 水獭 (S) (87: 13)
haira- 「慈しむ」 hairambi	孩拉米 hailami 爱 (84b: 66)
hairara	[həilərə], [həilerə] 爱惜 (88a: 5)
hairacuka 「惜しむべき」	[hairafik'a] 可惜 (87: 30)
hairacun 「惜しむところのある」	[hairats'i] 怜悯 (87: 30)
hala 「姓」	[hala] (FY) (87: 6)
halhūn 「熱い、暑い」	[hailihun] (BY) (87: 10) [hailihon], [hailihon] (88a: 19)
halmari 「神刀(薩満が祈祷の際に用いる刀)」 ⁵⁴	[harma], [harmanga] 神刀环子 (重音是在 [ma] 音上) (88a: 14)

⁵¹ (88a: 2)は、女真語における同源語の発音は満洲語の [haɥ'in] (hacin)ではなく、バラ語の [hat'in] と同様であると述べている。即ち、女真語の同源語の第 2 音節の音節頭子音(onset)は破擦音ではなく破裂音であるという見解である。しかし、JA の漢字音写「哈稱因」(K 101, 103, 129, 144, 146 = *hač̣in; W 70, 77, 81, 92 = *haɥin)、及び JB の漢字音写「哈尺」(Kn 144, 348 = *hači)に基づけば、対応する子音は破擦音と見なされるのが妥当である。また、『女真文辞典』(金啓琮 1984: 45, 89, 索引 33)に記載される *xaɥin, *xaɥin も参照されたい。更に、Цинциус и др. (1975: 465)は WM hacin と JA 「哈稱因」のツングース諸語における同源語を挙げているが、該当子音はいずれも破擦音または摩擦音であり、破裂音として現れる例はない。

⁵² [havə] と [ɔldɔ̃] はそれぞれ WM の hafan と ordo に対応すると考えられる。WM ordo はモンゴル語 ordo (内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 1999: 220 では「宮殿」や「官邸」等と訳している)からの借用語である(Rozycki 1983: 222)。また、(88a: 4)によると、バラ語の [ɔldɔ̃] (卧鲁朵)は古代モンゴル人あるいは契丹人との交流に由来するという。

⁵³ WM hafirakū 「毛抜き ; 蟹の螯」とバラ語 [haifugu] 「打野兽的夹子」は意味上が異なるものの、WM hafirakū は hafira- 「挟む」 + -kū 「名詞形成接辞」に由来する語であり、後者もこれに対応する要素に由来すると考えられる。

⁵⁴ JA には「罕麻」(漢訳=劍)(K 1009 = *hanma; J 202, 283 = *xan-ma; W 81 = *halma)があり、von Zach (1897: 107)及び Tang (2012)はこの語は WM halmari の同源語であると指摘している。従って halmari の -ri は名詞形成接辞である可能性がある。バラ語 [harma] は JA 「罕麻」及び WM halmari の halma- に対応し、[harmanga]

hamu 「大便」	[humu] 人糞便 (BY) (87: 9)
hangsi 「清明節」	[hanʃi] 清明节 (87: 22)
hara 「秋に剥いだ獣の皮で他の獣より毛の短いもの」	[hara] (重音節在 [hara] 的 [ra] 中) (88a: 13)
hara 「秋に剥いだ獣の皮で他の獣より毛の短いもの」+ -la 「動詞化接辞」+ -mbi 「未完了接辞」	[haralami], [haz(r)lami] 熟秋板子毛皮 (重音節 [la]) (88a: 13)
hargi 「急流」+ α	[hargirə], [hargiʔə] 急流 (88a: 23)
harha 「靴の底以外の部分、時には両側面部のみを指す」	[harhai], [hargai] 靽鞢帮子 (88a: 20)
hasi 「茄子」 ⁵⁵	[k'itsə] 茄子 (87: 23) [k'ijətsə] 茄子 (88a: 24)
hasiba 「庇護」<S>	[huiʃibə] 遮掩 (87: 30)
hatuhūn 「塩辛い」	[hant'ihun] 咸味 (87: 29)
hebeše- 「相談する」+ -cuke 「～可能な」 ⁵⁶	[həvəʃik'ə] 可商議的 (87: 30)
hedereku 「熊手」	[hədərək'u] 撈草扒子 (87: 29)
helmen 「影」	[hərəmu], [hərənp'u] 影子 (88a: 9) ⁵⁷
hengke 「瓜」	[həŋ] ([dueilihəŋ] 黃瓜 (GT)) (87: 18)
hergen 「字」	[hergən] (FY) (87: 7)
hergimbi 「さまよう」	[həŋgimi] 游蕩徘徊 (87: 15)
hethembi 「湯搔く」	[hat'həmi], [hat'həmi] 開水炸野菜 (88a: 6)
heture- 「道を阻む」+ -hen 「名詞形成接辞」<S>	[hət'ərən] 捕野兽的地窖 (87: 29)
heye 「目脂」	[həjə] 眼眵 (87: 29)
hibsu 「蜂蜜」	西布蘇 xibusu (84b: 67)
hishan 「汚れ」	[hishan] 汚子 (87: 29)
hiyan 「線香」	[hiən] (87: 22)
hojihosi 「婿たち」	[hədihəsi] 众女婿 (87: 29)
hon 「非常に」	[həŋ] ([həŋ ək'ufərin] 大忙季节) (88a: 18)

は [harma] に [ŋga] (WM -ngga に対応する接辞)が付加されて形成された語であると考えられる。

⁵⁵ WM hasi は漢語の「茄子」からの借用語である(Schmidt 1933: 261)。WM hasi 及びバラ語 [k'itsə], [k'ijətsə] は共に漢語「茄子」を語源とするが、WM hasi は既に定着し音変化を経た形式である一方、バラ語形式は漢語をより直接的に借用したものである。

⁵⁶ 原文では [həvəʃik'ə] における [ʃik'ə] は接辞であると記述している。この [ʃik'ə] は WM の -cuke に対応すると考えられる。また、[həvə] の部分は WM の hebe 「相談；会議」と同源と考えられる。但し、hebe は名詞であり、-cuke は通常動詞語基に後続する。WM で「相談する」を意味する動詞には heb(e)de-, hebeše- があり、それぞれ hebe に接辞 -de, -še がつく形式である。もし、[həvəʃik'ə] が hebeše- + -cuke の同源語であるならば、重音脱落(haplology)が発生している可能性がある。

⁵⁷ 原文では、ここの [p'] が [m] の音変化の結果であると述べており、[p'u] は派生接辞ではなく、音変化を経た語根の一部であるとの解釈である。

hontoho 「半分」	[hɔndəhə], [hɔnt'əhə] 一半 (88a: 8)
hose 「小箱(漢語盒子)」	[hɔtsə] 盒子 (87: 22, 23)
hoto 「瓢箪」	[hult'ɔ] 葫芦 (87: 22)
hunio 「水桶」+ -ku 「名詞形成接辞」	[huniɔgu] 水罐子 (87: 28)
hurungge 「甲羅のある」	[hurugə] 有盖的(龟甲) (87: 30)
hutu 「鬼」	[k'ut'u] (BY) (87: 9)
hūrhan 「魚を捕らえる大網」	[hurhan] 捕鱼的围网 (87: 29)
hūsihan 「スカート」	[hufiɡa] (S) (87: 11)
hūsun 「力」	[husun] (FY) (87: 7)
hūturi 「福」	胡鄙哩 hubili [sic] (84b: 66) ⁵⁸
hūya 「中型ののろじか」	[huja] 中等孢子 (87: 29)
i 「の」	依 yi (博依达苏苏 bo yi da susu 故乡) (84b: 66) (木再依达苏苏 muzaiyi da susu 我的家乡) (84b: 67) 尼 ni (巴彦尼, 遮根采岭 bayan ni zhegencailing 富裕的张广才岭) (84b: 67) [i] (87: 25, 26; 88a: 22) [ni], [ki], [n], [k'i], [gi] (87: 25)
ibagan 「妖怪」	[ijahan] (GT) (87: 18) (88a: 11)
icakū 「気に入らない」	[iɕ'ik'u] (FY) (87: 7)
ice 「新しい」	[iɕ'i] (FY) (87: 7)
ici 「右 ; 方向」	[iɕ'i] 右 (S) (87: 12)
ihan 「牛」	[wəihan] 牛 (87: 29)
ikūmbi 「縮む」	[ik'ɔmi] (FY) (87: 7)
ilenggu 「舌」	[iləngu] 舌头 (87: 29)
ilha 「花」	[ilha], [ila] ([ut'u ilha], [ut'uila] 石竹花) (87: 15) [ila], [ira], [ilha] (88a: 15)
indahūn 「犬」	[indahən], [indahə] (88a: 19) ⁵⁹
inenggi 「日」	依能吉 yinengji (依能吉达力 yinengjidali 天天) (84b: 67) [iniɕ] (88a: 16)
inggari 「柳絮」	[iŋk'ali] 杨柳絮 (87: 28)
ini 「彼の、彼女の」 ⁶⁰	[in] 他的 (87: 25)
iru- 「沈む」+ α ⁶¹	(X) [irlən], (W) [iruri] 网坠子 (BT) (87: 20)

⁵⁸ Hölzl (2021: 175)は、原文の「胡鄙哩」(hubili)は「胡留哩」(hutuli)の誤植であると指摘している。「留」は「圖」の異体字(この場合は tu と読む)または「鄙」(この場合は bi と読む)の異体字である。

⁵⁹ バラ人が犬肉を食べることを禁じるか否かについて、研究者によって記述に違いがある。(84b: 65)は禁じると述べているのに対し、李自然(2010: 80)は禁じないと述べている。

⁶⁰ バラ語 [in] には、WM ini の語末の i に当たる要素が見られないが、脱落していると考えられる。当該要素は属格標識であり、属格標識の形式については表中の i 「の」の行を参照されたい。

⁶¹ バラ語 [irlən], [iruri] は、WM iru- 「沈む」と同源の語基に、それぞれ派生接辞が付加されて形成された語と分析される。[iruri] の [ri] は、WM の名詞形成接辞 -ri に対応するものと考えられる。一方、[irlən] の [lən] は、WM jobolon 「憂患」の -lon と関連している可能性があるが、更なる検討が必要である。WM jobolon 自体は、モンゴル語の jobalang からの借用語である(Rozyski 1983: 170)。なお、WM の irukū 「沈子」は iru-

ja 「安い；易しい」	[tʃa] ([nə'an tʃa] 很容易) (87: 30)
jahari 「小石」	[dijahari] (BY) (87: 9)
jancuhūn 「甘い」	沾春 zhanchun (84b: 67) [tʃiaŋtʃihun] 甜味 (87: 29)
jari- 「神前で御神歌をあげる」 ⁶²	[tʃialinʒuə] 传说 (S) (87: 13)
jaya 「樺皮製の船」	[tʃiaja] 木槽船 (87: 29)
je- 「食べる」 ⁶³	这 zhe (这德瓦集嘎库 zhe de wajigaku 吃不完) (84b: 67)
jerkin 「眩しい光」	[tʃark'an] 光辉 (BY) (87: 10)
jeseri 「矢の一種」 <S> ⁶⁴	遮苏鲁 zhesulu 套子 (84b: 64)
jeyen 「刃」	[dəjən] 刀刃子 (87: 29)
jibehun 「掛け布団」	[bədihən] 被子 (S) (87: 11)
jili 「鹿等の角の根」 ⁶⁵	[dilin] 頭、脑袋、牲畜、兽、禽的头 (S) (87: 5) [dərɪn] 野兽头 (GT) (87: 18) [dili] 头 (87: 31)
ji- 「来る」 jimbi	[dimi] (S) (87: 12)
jio	[diu] (S) (87: 12)
jirga- 「安逸に暮らす」 jirgambi	[di'anmi], [di'anmi], [di'əmi] 安逸、自在 (88a: 20)
jirgara	[dirgara] 乐 (S) (87: 11)
jisiha 「榛」	[difiha] (S) (87: 12)

に別の派生接辞 -kū がついた語であり、意味的にはバラ語の [irlən], [iruri] と一致する。

⁶² ヘジェン族に「嫁令阔」(jialingkuo)という民間音楽があり(韋風・呂聶 1984)、バラ語の [tʃialinʒuə] と語源的関連性が存在する可能性がある。「嫁令阔」の語源については、李林静(私信)がヘジェン語キーレン方言(即ち本稿でいうキーレン語)の jari- 「歌う」を語根とする見解を指摘している。jari- は安俊(1986: 68, 99)は dzari-、Zhang et al. (1989: 4, 11, 120, 140)は /dʒiari/ [tʃiari] ~ [tʃiari] とそれぞれ表記し、ナーナイ語の対応語は Оненко (1980: 182)は дяли- [ʒari-] と表記している。孫亜強(2017: 91, 94)には tʃarink'ə 「歌」及び tʃari- 「歌う」という語形が収録されており、それぞれ「嫁令阔」及び jari- に対応するものである。Цинциус и др. (1975: 252)によれば、ナーナイ語のこの動詞の WM における同源語は jari- である。

⁶³ 原文は「这德瓦集嘎库」(zhe de wajigaku)である(漢訳=吃不完)。この文の解釈には、次の3つの可能性がある[2]と[3]は Hölzl 2021: 177 による)。(1) WM の jetere de wajihakū に対応。jetere の tere に相当する部分はない。(2) WM の jeme wajihakū に対応。「德」(de)は「莫」(mo)の誤記である可能性がある。-me waji- の例として、王慶豊(2005: 75)には黒河満洲語の buda dʒəmə vadʒəka 「飯吃完了」が挙げられる。(3) WM の jetere wajihakū に対応。jetere の te は「德」(de)に対応し、re に相当する部分はない。[1]と[3]は少なくとも満洲語口語の記録には類似する文型の例文がなく、文法的にも問題があると考えられる。また、WM jetere に対応するシベ語の形式は /je-re/ であるが、jere wajihakū も文法的に問題があると考えられる。

⁶⁴ バラ語「遮苏鲁」(漢訳=套子)は獵具の名である(84b: 64)。WM jeseri も獵具であるが、意味が異なる(Sulfa、私信)。なお、ソロン語の jottəl は「套儿、罩儿、帽儿」の意味がある(杜・道爾基 1998: 384-385)が、偶然の可能性はある。Biligt (私信)は jottəl は漢語の「罩头儿」からの借用語であると推測している。

⁶⁵ バラ語の [dilin], [dərɪn], [dili] は、エウエン語とネギダル語の dil 「頭」、エウエンキ語とソロン語の dil 「頭」、ウデヘ語とオロチ語の dili 「頭」、ナーナイ語とウイльта語の jili 「頭」、オルチャ語(ウルチャ語)の dili 「頭」と同源であると考えられる(エウエン語等の語形は池上 1989: 1075 による)。これらの語に対する WM の同源語は、Benzing (1956: 980)、池上(1989: 1075)、風間(1997: 13-14)は jili 「鹿等の角の根」を挙げている。Цинциус и др. (1975: 205-206)は jili に加えて gili も挙げているが、Alonso de la Fuente (2010/2011: 208)は WM の gili はエウエンキ語の gildii 「指輪」、gildiikään 「円；丸いもの」と語源的に関連するとしている。また、アルチュカ語の tərɪ, tərɪn, tiri 「頭；1 番目」(86a: 5)と [dəlin] 「野獣の頭」(87: 18)もバラ語の [dilin], [dərɪn], [dili] と同源と考えられる。なお、(86a: 4)によれば、アルチュカ語の tərɪn はヘジェン語及びキャッカラ語の同源語と同音であり、キャッカラ語には k'anta tərɪn 「石人头」と saŋkə tərɪn 「黒熊頭」の例がある。穆曄駿が言及しているキャッカラ語は、ロシアのキャッカラ語(Russian Kyakala、オロチ語群即ち Ikegami 1974 の第 II 群に属する)ではなく、中国のキャッカラ語(Chinese Kyakala)である(Hölzl 2018b)。

jobo-「苦勞する」 jobome	[ʧɔbɔmə], [ʧɔbɔmi], [ʧɔbɔm], [ʧɔbɔn], [diɔbɔm] ([bɔ] 是重音) (88a: 13)
jofoho「簞(やす)」	[ʧɔpʰuhu] 鱼叉 (87: 29)
juciba「蛭」	[duəʧʰiba] (BY) (87: 9)
jui「子供」	dʒi (86b: 25) [ʧui], [ʧi] (88a: 14)
juken sain「どうやら良い」	[ʧaŋkʰə tsʰai] 恰好 (BY) (87: 10)
julan「急流で凍結しない処」	[ʧaŋlin] 江河冬季不冻的清沟 (87: 15)
julen「古事を語る詞」	[ʧaŋlan] 故事 (S) (87: 12)
julen「古事を語る詞」 + α ⁶⁶	[ʧanlarimi] 讲故事 (S) (87: 12)
julergi「前方；南」 ⁶⁷ / Julesi「前方へ；南へ」	[diulə] 前面 (BY) (87: 9) [ʧuləhi] 东 (S) (87: 12) [ʧulə] 前面 (S) (87: 12) [dʒulərgi], [ʧuləŋgi] (87: 15)
julgen sain「首尾の良い」 + alin「山」	张广才岭 zhangguangcailing (84a: 97; 85: 5) ⁶⁸ zhe gen sa lin, 遮根猜阿林 zhegencai alin (84a: 97) 遮根萨岭 zhegensaling (84b: 66) 遮根采岭 zhegencailing (84b: 67) 獐光材山 zhangguangcaishan (87: 2) 獐光材岭 zhangguangcailing (87: 2) 獐光材 zhangguangcai (87: 17) 獐光采 zhangguangcai (87: 17) 獐光才 zhangguangcai (87: 19) 獐光材 zhangguangcai (87: 20)
julhū「手綱」	[ʧaŋhuə] 骑马用的扯缰 (87: 15)
jušuhun「酸っぱい」	[diəʃihun] 酸味 (87: 29)
juwali「青蛙」	[dueili] 青蛙 (GT) (87: 18)
juwali「青蛙」 + hengke「瓜」 ⁶⁹	[dueilihəŋ] 黄瓜 (GT) (87: 18)
juwe「二」 + undehen「板」 <S>	朱温德 zhuwende 对板 (84b: 65)
juyen「袍下に着る綿入れ短衣」	[dujən] 在皮达乎里面穿的小袄 (87: 29)

⁶⁶ 原文ではバラ語の [ʧanlarimi] は WM の julen arambi に対応している。バラ語の [ʧanlarimi] の語幹 [ʧanlari-] は [ʧaŋlan]「物語」に派生接辞 [-ri] がついて形成されたと分析できる。[ʧaŋlan] 自体の由来は julen ではなく、[ʧaŋ] が漢語の「讲」、[la] が動詞化接辞 -la にそれぞれ由来する可能性も排除できない。

⁶⁷ WM の julergi「前方」は、jule- と ergi「方向」の融合によると考えられる。バラ語の [diulə], [ʧulə] は WM の julergi の jule- の部分と同源であると考えられる。

⁶⁸ 「张广才岭」や「遮根采岭」における「岭」(ling)は「山脈」の意味であるが、同時に WM の alin「山」の音写でもあったと考えられる(Hölzl 2020: 168; 2021: 180)。

⁶⁹ [həŋ] の部分は WM の hengke と同源と考えられるが、[dueili] の部分はバラ語における同音の [dueili]「青蛙」に由来する可能性がある。アルチュカ語における「きゅうり」も「青蛙」+「瓜」に由来すると考えられる(王海波 2025a: 255)。また、漢語「冬瓜」に倣った「夏瓜」、すなわち WM juwari + hengke の同源語に由来する可能性もある。

参考文献

- Alonso de la Fuente, José Andrés. (2010/2011) Written Manchu *uju* 'head'. *Ural-Altaische Jahrbücher, Neue Folge*. 24: 204-226.
- . (2011) Venjukov's [1858] 1862/1868 Nanai materials. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*. 93: 11-35.
- 安俊(1986)『赫哲語簡誌』北京：民族出版社。
- Benzing, Johannes. (1956) *Die tungusischen Sprachen: Versuch einer vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Doerfer, Gerhard. (1973) Das Kur-Urmische und seine Verwandten. *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn*. 7: 567-599. Wiesbaden: Harrassowitz.
- . (1975) Ist Kur-Urmiisch ein nanaischer Dialekt? *Ural-Altaische Jahrbücher*. 47: 51-63. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 杜・道爾基(1998)『鄂漢詞典』海拉爾：內蒙古文化出版社。
- 福田昆之(2008)『増訂滿洲語文語辭典』横浜：FLL.
- 羽田亨(1937)『滿和辭典』京都：京都帝國大學滿蒙古調查會。
- Hauer, Erich. (2007) *Handwörterbuch der Mandschusprache, 2., durchgesehene und erweiterte Auflage herausgegeben von Oliver Corff*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Hölzl, Andreas. (2015) A typology of negation in Tungusic. *Studies in Language*. 39(1): 117-157.
- . (2017) New evidence on Para-Mongolic numerals. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*. 96: 97-113.
- . (2018a) Das Mandschurische: Ein diachroner Überblick. Vortrag am Asien-Orient-Institut der Universität Zürich. 16. März 2018.
- . (2018b) Udi, Udihe, and the language(s) of the Kyakala. *International Journal of Diachronic Linguistics and Linguistic Reconstruction*. 15: 111-146.
- . (2020) Bala (China): Language Snapshot. *Language Documentation and Description*. 19: 162-170.
- . (2021) The Only Known Text from Bala, An Extinct Tungusic Language. *Studia Orientalia Electronica*. 9(1): 173-191.
- 胡增益(1994)『新滿漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。
- (2020)『新滿漢大詞典(第2版)』北京：商務印書館。
- Ikegami, Jiro. (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. In: Georg Hazai und Peter Zieme (eds.), *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*. 271-272. Berlin: Akademie Verlag.
- 池上二良(1989)「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』(世界言語編第二巻). 東京：三省堂。
- (1999a[1953])「滿洲語の動詞語尾 -ci 及び -cibe について」『滿洲語研究』258-271. 東京：汲古書院。
- (1999b[1993])「滿洲語方言研究における穆曄駿氏採集資料について」『滿洲語研究』321-

343. 東京：汲古書院.
- Janhunen, Juha. (2024) Tungusic as a language family. In: Alexander Vovin, José Andrés Alonso de la Fuente and Juha Janhunen (eds.), *The Tungusic Languages*. 1-18. Abingdon: Routledge.
- 金光平・金啓琮(1980)『女真語言文字研究』北京：文物出版社.
- 金啓琮(1984)『女真文辭典』北京：文物出版社.
- 金燾方(1990)「從女真語到滿洲語」『滿語研究』1990(1): 46-52, 36.
- Kane, Daniel. (1989) *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Bloomington: Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies.
- Kara, György. (1991) Jurchin notes. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. 45(1): 149-158.
- 風間伸次郎(1996)「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』109: 117-139.
- (1997)「ツングース諸語における基礎語彙 A (名詞編)」『알타이학보』7: 11-62.
- (1998)「ツングース諸語における基礎語彙 A (動詞・形容詞編<承前>)」金子亨(編)『「北方ユーラシア先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究」研究成果報告書(第四分冊)」45-82. 千葉：千葉大学.
- Kazama, Shinjiro. (1998) Genetical position of Hezhen. In: Osahito Miyaoka and Minoru Oshima (eds.), *Languages of the North Pacific Rim. Vol. 4*. 115-131. Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University.
- . (2024) Nanai. In: Alexander Vovin, José Andrés Alonso de la Fuente and Juha Janhunen (eds.), *The Tungusic Languages*. 364-406. Abingdon: Routledge.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment*. Kyoto: Horitsubunkasha.
- 児倉徳和(2018)『シベ語のモダリティの研究』東京：勉誠出版.
- 李思齊(2021)「遼慶陵東陵人物壁画契丹小字墨書の復原与考釈—兼論東陵聖宗陵説」『北方文物』2021(3): 87-97.
- 李自然(2010)「滿族忌食狗肉原因考」『黒龍江民族叢刊』2010(3): 79-81.
- Ligeti, Louis. (1953) Note préliminaire sur le déchiffrement des »petits caractères« joutchen. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. 3: 211-228.
- 林立娟・王銘玉(2024)「中俄跨境赫哲語與那乃語語言能力建設比較研究」『東疆學刊』2024(2): 124-133.
- 凌純聲(1934)『松花江下游的赫哲族』南京：國立中央研究院歷史語言研究所.
- Menges, Karl. H. (1987) On Tungus alba- “non posse, не мочь” and other negative auxiliary verbs. *Central Asiatic Journal*. 31(1/2): 7-18.
- 穆曄駿(1984a)「吉祥如意的山—張広才嶺」『黒龍江文物叢刊』1984(1): 97.
- (1984b)「居住在張広才嶺的滿族“巴拉人”」『黒龍江文物叢刊』1984(2): 64-68.
- (1985)「阿勒楚喀滿語語音簡論」『滿語研究』1: 5-15.
- (1986a)「阿勒楚喀滿語的數詞与格助詞」『滿語研究』2: 2-18.
- (1986b)「拉林滿語語音概論」『滿語研究』3: 2-30.
- (1987)「巴拉語」『滿語研究』5: 2-31, 128.

- (1988a)「論巴拉語的語音變化」『滿語研究』6: 1-26, 93.
- (1988b)「阿勒楚喀語元音發聲的音變特點」『滿語研究』7: 1-24.
- 內蒙古大學蒙古學研究院蒙古語文研究所(1999)『蒙漢詞典(增訂本)』呼和浩特：內蒙古大學出版社。
- Norman, Jerry. (2013) *A Comprehensive Manchu-English Dictionary*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Asia Center.
- Оненко, С.Н. (1980) *Нанайско-русский словарь*. Москва: Издательство «Русский язык».
- Rozycki, William. (1983) *Mongol Elements in Manchu*. Doctoral dissertation. Indiana University.
- Schmidt, Peter. (1933) Chinesische Elemente im Mandschu. Mit Wörterverzeichnis (Fortsetzung). *Asia Major*. 8: 233-276.
- Суник, О.П. (1958) *Кур-урмийский диалект: Исследования и материалы по нанайскому языку*. Ленинград: Учпедгиз.
- 宋和平・孟慧英(1997)『滿族薩滿文本研究』台北：五南圖書出版公司。
- 孫伯君(2016)『金代女真語』北京：中國社會科學出版社。
- 孫重強(2017)『簡明赫哲語詞典』哈爾濱：黑龍江人民出版社。
- 田村實造・今西春秋・佐藤長(1966-1968)『五體清文鑑譯解』京都：京都大學文學部內陸アジア研究所。
- Tang, John. (2012) Jurico-Manchurica: Short-legged bear. *Journal of Sino-Western Communications*. 4(2): 45-52.
- Цинциус, В.И., В.А. Горцевская, В.Д. Колесникова, О.А. Константинова, К.А. Новикова, Т.И. Петрова и Т.Г. Бугаева (1975) *Сравнительный словарь Тунгусо-Маньчжурских языков: Материалы к этимологическому словарю. Том I*. Ленинград: Наука.
- von Zach, Erwen Ritter. (1897) Einige weitere Nachträge zum Jucen-Deutschen Glossar Prof. Grube's. *T'oung Pao*. 8(1): 107-108.
- 王海波(2025a)「アルチュカ語語彙集—穆曄駿資料の滿洲語文語索引—」『北方方言研究』15: 237-276.
- (2025b)「バラ語の否定標識」『KOTONOHA』276: 1-8.
- 王慶豐(2005)『滿語研究』北京：民族出版社。
- 韋風・呂聶(1984)「赫哲族民間音樂」『中國音樂』1984(1): 65.
- 烏拉熙春(2002)『女真語言文字新研究』京都：明善堂。
- (2009)『明代の女真人：「女真訳語」から「永寧寺記碑」へ』京都：京都大學出版會。
- Zhang, Yanchang, Xi Zhang and Shuyan Dai. (1989) *The Hezhen Language*. Changchun: Jilin University Press.

A Bala Vocabulary (Part I):
Written Manchu Index to the Fieldwork Data Collected by Yejun Mu (A-J)

Haibo WANG
(Lingnan Normal University)

Keywords: Bala, Yejun Mu, Written Manchu, Manchuric

This paper provides the first half (entries A-J) of a Written Manchu index for the fieldwork data on the Bala language collected by Yejun Mu. The Bala words in Yejun Mu's research are scattered across several papers, and different forms of a single word are often recorded in separate papers. This paper aims to systematically organize the Bala vocabulary documented by Yejun Mu, based on the cognates in Written Manchu.

(おう・かいは boljon@163.com)